ライフスタイル

探訪 新ライフスタイル

備後デニムのものづくり

職人らが着用して「加工」

「メイドインジャパン」が根強く生きている備後地域を訪れた。備後圏は広島県と岡山県にまたがる6市2町で構成される。海岸部は瀬戸内海の真ん中に位置し、古くから福山市の鞆の浦や尾道は重要な港として栄えてきた。背景には備後国として一つであった歴史があり、今でもモノづくりでの地域間の結びつきが強い。

生産量日本一を誇るデニムの産地であるルーツは1622年に初代福山藩藩主として福山城を築いた、徳川家康のいとこの水野勝成公にある。都市整備と地域経済の振興を同時に推進、領内の殖産興業のために木綿の製織・販売を奨励し綿花栽培や織物づくりが盛んとなった。備後絣（かすり）に代表される丈夫で安価で実用向きの備後織物は、昭和30年代までは全国へと普及した。

1870年代にアメリカで作業着として生み出されたジーンズは、現在では世界中でカジュアルファッションとして定着した。戦後日本においてはリーバイスなど輸入物が中心だったが、1960年代から国内のデニム需要が高まり、染色技術、縫製技術、厚手生地の取り扱いなどの基礎が蓄積されていた備後でデニム生産が開始された。

福山市に拠点を置くカイハラは、国内のジーンズの2本に1本はカイハラのデニム生地という日本一のデニム生地のメーカーとして、ユニクロやGAPなどのカジュアルラインから海外ハイブランド、ジーンズ発祥の地であるアメリカのリーバイスまでもが取り扱うようになった。

衣料品の消費トレンドが安い服へと流れ、アパレルメーカーは人件費が安い海外工場での生産にシフトし、国内でつくられる日本製は少数になった。

しかし、備後圏域には良質なデニム生地生産が続くことで、メーカーズシャツ鎌倉（神奈川県鎌倉市）のデニムシャツはすべてカイハラの生地からつくられ、共同開発したデニム生地の作務衣は多くの鎌倉の寺院で着用され、一般顧客にも販売され始めた。メーカーズシャツ鎌倉の貞末哲兵副社長は「着れば着るほど生地の良さが肌に伝わり味わいも出る」と言う。

隣接する尾道市では2014年に商店街に「ONOMICHI DENIM SHOP」が開業。職業人一人ひとりが履きこんだユーズドデニムを販売するのが特徴だ。値付けされた商品にはどのような職人が履いていたかのタグがついており、鉄工所、板金、美容師や板前、メロン売りなど仕事でつくシミや汚れも良い味となる。機械でユーズド加工を施し大量生産するユーズドデニムとは異なる物語が伝わる。

メイドインジャパンの産地と販売先との良好な関係が築かれると、エンドユーザーに着心地や値ごろ感、社会倫理も伝わり、メーカーやモノづくり職人への持続可能な仕組みへとつながる。備後の職人文化はローカルファースト、エシカル、サステナビリティといった時代の要請に応えていた。

（商い創造研究所代表　松本大地）

「ONOMICHI DENIM SHOP」では、実際に職人が着用したユーズドデニムを販売する